害獣を宝に！
富士宮シカ利活用プロジェクト

害獣として駆除されたシカの利活用を通して、
地域活性化を図るプロジェクト

**株式会社
ふもとっぱら**
所在地：富士宮市
ホームページアドレス
https://fumotoppara.net/
TEL 0544-52-2112
シカ肉・皮・角の提供、製品開発

企業

全日本鹿協会
所在地：磐田市
ホームページアドレス
https://nihon-shika.info/
TEL 0538-31-7919
全体総括、イベント企画

NPO

**静岡県立農林環境専門職大学/
日本大学生物資源科学部**
所在地:磐田市/藤沢市
ニホンジカ調査、被害調査

大学

地域の企業や団体
森のたね、富士宮・食のひらめき会、柿ノ木、太鼓の会、静岡県立大学

エコツアー、商品開発、利用

その他

全日本鹿協会が総括、シカの肉や皮等を(株)ふもとっぱらが提供し、地域の企業や団体が商品開発を行っています。さらにエコツアーやワークショップを行い、シカの利活用が地域活性化のツールとなっています。

ニホンジカによる被害と捕獲の現状

静岡県では二ホンジカによる農林業被害、自然植生の衰退、交通事故が問題になっています。二ホンジカの増加を抑制するために県では2020年、28,410頭（うち富士宮では2,834頭）を捕獲しましたが被害は続いており、また捕獲個体のほとんどは廃棄され活用されていません。

キャンプ聖地「ふもとっぱら」と全日本鹿協会

富士山麓にある㈱ふもとっぱらは、キャンプの聖地として有名ですが、広大な敷地での林業が主な事業で、20年以上前からシカによる被害に苦しんできました。代表取締役である竹川将樹さんは、日本大学で林業について講義をした際、日大の教員であり全日本鹿協会の小林信一さん（現在は静岡県立農林環境専門職大学教員）と出会います。ふもとっぱらの林業被害を知った小林さんはふもとっぱらを研究フィールドとして、日大の学生達（2020年以降は県立農林環境専門職大学の学生達）とシカの行動調査や生体捕獲、被害実態調査などを行うことになりました。

小林さんは、シカ被害発生は、荒廃した山中に餌が少なくなり、シカが集落に出没して農産物を食べるようになったためで、農山村の衰退に拍車をかけています。農山村の振興には、都市から農村へ人の還流が必要と考えました。そして、廃棄されているシカを利活用し、地域活性化に資する方法を模索していくことになります。

ふもとっぱらでのシカの利活用が、被害の防止に有効で、企業としてもメリットがあると考えた竹川さんは、2019年、敷地内にシカ食肉処理施設を整備し、生肉、ジビエバーガーや竜田揚げ、ジャーキーやソーセージ、革製品等の製品化に乗り出します。

富士宮鹿利活用プロジェクト始動

同時に、全日本鹿協会とふもとっぱらは、被害対策の啓蒙やシカ製品の普及の為にエコツアーやワークショップ等のイベントを開催。その過程で、静岡県立大学、ネイチャースクール「森のたね」、富士宮商店街企業組合である「富士宮・食のひらめき会」、福祉事業所「柿ノ木」、「太鼓の会」等、様々な分野の方が関わることになり、シカを地域の宝ととらえ、地域活性化に役立てようと、協働プロジェクト「富士宮鹿利活用プロジェクト」が立ち上がりました。

静岡県立農林環境専門職大学はシカの行動調査や被害調査、静岡県立大学はシカ肉の食品分析、森のたねはエコツアーやワークショップ、皮なめし、角を利用した製品開発等、富士宮・食のひらめき会は曽我漬鹿肉の開発、柿ノ木は鹿革を使ったエコバック、太鼓の会は鹿革と富士宮間伐材を使用した太鼓の製作を行っています。

プロジェクトの成果

現在、シカ個体数は減少傾向にありますが、依然として被害は続いています。一方、ふもとっぱらでのシカ処理は年間250頭となり、肉のみでなく皮や角の利用などの資源利用は進んできています。

Point

野生のシカを観察するエコツアーを含め、地域の様々な関係者がそれぞれの得意分野で、シカの全身活用を協働で実施しているプロジェクトは全国的にも珍しいです。被害対策としてのシカの捕獲が地域活性化にもつながるという視点を取り入れたことで、様々な分野の方が参加することとなり、大きなプロジェクトに発展しました。

これからの展望

竹川さんも小林さんも共に「捕獲して利活用する事と同時にシカの棲める森づくりも大切」とおっしゃっていました。科学的根拠に基づいた個体数の把握と森林整備を軸に、持続可能なシカの利活用を進めていきたいそうです。
また、現在シカによる被害の多い伊豆地域にもプロジェクトの輪を拡大していく予定です。